

## 「不正の富」

ルカの福音書 16:9~18

### はじめに

ルカの福音書 13~14 章前半までは、食卓や宴会の様子を用いたたとえが多く見られましたが、14 章後半からはお金や家畜、兵（しもべ）など人の財産にまつわるたとえが多く記されています。今回はそんな財産を管理している一人のしもべについてのたとえでした。このしもべは主人の財産を無駄遣いする不正な管理人でした。これに対して主人は怒り、彼から管理の仕事を取り上げることにした、というたとえの中にイスラエルの神、主に仕える祭司の民として選ばれたイスラエルの民が表されていると述べました。しかしそんな彼らが主に逆らい、偶像礼拝により主の怒りを引き起こし、まさに正しくない、不正な者となり、やがて国土を追われ「離散の民」となったという事実が、この不正な管理人が主人の財産を無駄遣いし、まさに「散財した」というたとえの中には表されていると述べました。

しかし結果的にこの管理人は主人にほめられる「賢い」管理人ともなりました。それは彼がその職権を用いて友をつくったからでしたが、ここに使われている「賢い」という意味のアーラムは、その初出箇所である出エジプト記 15:8 から、イスラエルを襲う危機の中で主の息、霊によって「起こされる、立ち上がる」存在を指し示しており、それはすなわち終わりの日、反キリストによる大患難の中で神の印を受ける 144,000 人の「イスラエルの残りの者」を指し示していると述べました。この存在とその働きによって御国の福音が全世界に宣べ伝えられ、数えきれないほどの大勢の群衆、諸国の民が救われ、天の御座の前に上げられる、ということがヨハネの黙示録 7 章の預言の成就であることはもう何度もお伝えしているとおりです。そしてその事実がこの不正な管理人が主人にほめられることとなった「友をつくった」という行為にたとえられていると述べました。今日はその続きとなります。

### 1. 友をつくりなさい

ルカの福音書【新改訳 2017】

16:9 わたしはあなたがたに言います。不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうすれば、富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます。

前回の債務証書を不正に書き換えて友をつくった不正な管理人、これを終わりの日のイスラエルの残りの者の存在とその働きによって救われる諸国の民をたとえたものとするならば、それに続く上記のたとえはそれを繰り返し強調する意味を持つものとなります。つまりこの「不正の富」もまた「不正な管理人」と同じくイスラエルの残りの者を指しているのです。ちなみに「不正な」と訳されているヘブル語アーヴァル(עוול)は本来、ヤコブの家畜に「乳を飲ませる」という意味の言葉なのです。

創世記【新改訳 2017】

33:13 ヤコブは彼に言った。「あなた様もご存じのように、子どもたちは弱く、乳を飲ませている羊や牛は私が世話をしています。一日でも、ひどく追い立てると、この群れはすべて死んでしまいます。

また「富」と訳されたケセフ(קֶסֶף)は動詞カーサフ(קָסַף)と同じ綴りで、その本来の意味は「ヤコブが父の家を慕い求める」となります。

創世記【新改訳 2017】

31:29 …昨夜、あなたがたの父の神が私に、『あなたは気をつけて、ヤコブと事の善悪を論じないようにせよ』と告げられた。

31:30 …あなたは、あなたの父の家がどうしても恋しくなって出て行った…。」

ヤコブすなわちイスラエルの子どもたちが「ひどく追いつ立て」られることなく「乳を飲ま」されて養われること、そして「父の家が…恋しくな」ることすなわち御国を、主イエシュアの再臨を求めること、この二つの出来事を「不正の富」は指し示しているのです。それはすなわち終わりの日、反キリストによる激しい迫害という大患難の中でも害を受けることなく

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

12:14 女には大きな鷲の翼が二つ与えられた。荒野にある自分の場所に飛んで行って、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前から逃れて養われるためであった。

と預言されている「女」にたとえられているイスラエルの残りの者を指しているのです。このような終わりの日に起こる神のご計画が「不正の富」というたとえの中には神の国の奥義として秘められているのです。

そしてそれによって「友をつくりなさい」とイエシュアはたとえて言われました。ここに使われている「友」はアーハヴ(אַהֲבָה)で、本来はアブラハムの「愛する息子」を指し示す言葉です。

創世記【新改訳 2017】

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。

アブラハムの子すなわちアブラハムから生まれる、アブラハムにつながる者をアーハヴは指し示しています。ここまでのたとえの解釈からこの「愛しているひとり子」すなわち「友」とはイスラエルの残りの者から御国の福音を聞き、それを信じ受け入れる大勢の諸国の民（黙示録 7:9）を表していると言えます。イエシュアはこの事実を別の箇所でもこうもたとえて預言しておられます。

ルカの福音書【新改訳 2017】

21:20 しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。

21:22 書かれていることがすべて成就する、報復の日々だからです。

21:23 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。この地に大きな苦難があり、この民に御怒りが臨むからです。

この哀れな女たちとは、大患難の中にいるイスラエルの残りの者を指しており、それが子を産むと預言されています。この生まれる「乳飲み子」が「不正の富」によって得る「友」と同じ意味を秘めているということです。

では「そうすれば、富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます」とはどういう意味でしょうか。これはヘブル語でなければ絶対に解けないたとえです。「富がなくなったとき」というここに使われているカーラー(הָלָא)の初出箇所を見てください。

#### 創世記【新改訳 2017】

2:1 こうして天と地とその万象が完成した。

このように「富がなくなったとき」ではなくこれは「完成するとき」と理解すべきたとえで、すなわちイスラエルの残りの者の働き、業が完成、完了する、果たし終える時を指し示すたとえであり、それはすなわち彼らの宣教の業によって終わりの日の大患難の中からすべての国民の中から救われるべき諸国の民、異邦人が救われ、その数が満ちる時です。まさにこう記されているとおりです。

#### ローマ人への手紙【新改訳 2017】

11:25 兄弟たち。あなたがたが自分を知恵のある者と考えないようにするために、この奥義を知らずにいてほしくはありません。イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、

11:26 こうして、イスラエルはみな救われるのです。「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬虔を除き去る。

11:27 これこそ、彼らと結ぶわたしの契約、すなわち、わたしが彼らの罪を取り除く時である」と書いてあるとおりです。

「こうして、イスラエルはみな救われる」という神のご計画、それが「富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます」というたとえに隠された「神の国の奥義」なのです。イスラエルの残りの者は大患難を生き残り、メシア王国、千年王国に迎え入れられます。そのような神のご計画がこのたとえには秘められているのです。ちなみに「イスラエルはみな」とは「全イスラエル」「イスラエルの子らのあらゆる部族の者」すなわち十二の部族からなるイスラエルという意味で、それはまさに黙示録7章に記された神の印を受けた144,000人のイスラエル、イスラエルの残りの者を表しているのです。

#### ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:4 私は、印を押された者たちの数を耳にした。それは十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押されていた。

7:5 ユダ族から一万二千人が印を押され、ルベン族から一万二千人、ガド族から一万二千人、

7:6 アシエル族から一万二千人、ナフタリ族から一万二千人、マナセ族から一万二千人、

7:7 シメオン族から一万二千人、レビ族から一万二千人、イッサカル族から一万二千人、

7:8 ゼブルン族から一万二千人、ヨセフ族から一万二千人、ベニヤミン族から一万二千人が印を押されていた。

## 2. 忠実な人

ルカの福音書【新改訳 2017】

16:10 最も小さなことに忠実な人は、大きなことにも忠実であり、最も小さなことに不忠実な人は、大きなことにも不忠実です。

16:11 ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなければ、だれがあなたがたに、まことの富を任せられるでしょうか。

16:12 また、他人のものに忠実でなければ、だれがあなたがたに、あなたがた自身のものを持たせるでしょうか。

「最も小さなこと」メアト(מֵאֲט) ミズアール(מִזְעָר)というこの言葉はイザヤ書 10:25、24:6、29:17 の三か所のみに使われているもので、その意味はいずれも「少しの、しばらくの間」という時間、期間を表す言葉です。つまりこれは「少しの間忠実な人」という意味であり、すなわち三年半という短い宣教の働きをなされたイエシュア、そして終わりの日の千二百六十日の間(黙 12:6) すなわち同じく三年半の働きをすることになるイスラエルの残りの者を指しています。ちなみに「忠実な」と訳されているヘブル語は、私たち教会もよく使う「まことに、確かに」という意味のアーメン(אָמֵן)で、神の御心、み旨、ご計画がその通りになることを信じることを意味する言葉です(創 15:6)。

そして「大きなこと」と訳されているラーヴァー(רָבָה)は「生めよ、増えよ(創 1:22)」と言われた神の祝福によって増加、増大、繁栄していくことを意味する言葉です。つまり「最も小さなことに忠実な人は、大きなことにも忠実であり」とはイエシュアのなされた宣教のようにイスラエルの残りの者がその三年半の業、働きを成し遂げるならば、だれも数えられないほどの大勢の諸国の民が救われ、さらにイスラエルは神の国において大いに増え広がり、繁栄するという神のご計画がここには表されているのです。

このたとえば「最も小さなことに忠実な人」は、「不正の富に忠実」な人は、そして「他人のもの(後のもの)に忠実」な人は、という形で三度も繰り返したとえられており、その奥義としての意味はすべて同じで今述べたとおりです。主がいかにこのご計画に思いを、力を注いでおられるかがお分かりいただけるでしょうか。

## 3. 神と富

ルカの福音書【新改訳 2017】

16:13 どんなしもべも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることになります。あなたがたは、神と富とに仕えることはできません。」

このたとえ、この御言葉はこれまで私たち自身に適用させる形でしか解釈されてきませんでした。つまり神だけに仕え、富は肉の欲であり憎むべきものだという理解です。しかしここにいたるまでの神のご計画の奥義としての解釈という流れからして、そのような適応はあり得ません（重層的にそのような意味もあるとは思いますが）。ここにもやはり終わりの日のイスラエルについての神のご計画が表されているのです。

まず「神と富」の「神」とはもちろん天におられる父なる神、主でありまた御子イエシュアです。そして「富」ケセフは先に述べた「不正の富」であり、それは大患難の中で宣教の働きをするイスラエルの残りの者です。彼らは大勢の諸国の民に福音を宣べ伝え、それを信じた者たちは殉教し天に上げられ、そして子羊の御座のみそばで仕える者となります。しかし一方の御国の福音を宣べ伝えるイスラエルの残りの者は最後まで地上で生き残り、その働きを全うします。この終わりの日の、天上で仕える者と地上で仕える者に分けられることを指し示したたとえそれが「二人の主人に仕えることはできません」「神と富とに仕えることはできません」というたとえに秘められた神の国の奥義なのです。このように終わりの日には天で仕える者と、地で仕える者とが起こされるのです。この両者に優劣はありません。事実、ここでイエシュアは神に仕えることだけを勧めてはおらず、また富に仕えることを非難することもしていないことを覚えてください。私たちが聞き、また宣べ伝える御国の福音とは、このような終わりの日に起こる神のご計画についてのものであり、私たちに命じたり禁じたりするものではないことをぜひ覚えてください。

#### 4. カづく

ルカの福音書【新改訳 2017】

16:14 金銭を好むパリサイ人たちは、これらすべてを聞いて、イエスをあざ笑っていた。

16:15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人々の前で自分を正しいとするが、神はあなたがたの心をご存じです。人々の間で尊ばれるものは、神の前では忌み嫌われるものなのです。

16:16 律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音が宣べ伝えられ、だれもが力づくで、そこに入ろうとしています。

16:17 しかし、律法の一画が落ちるよりも、天地が減びるほうが易しいのです。

16:18 だれでも妻を離縁して別の女と結婚する者は、姦淫を犯すことになり、夫から離縁された女と結婚する者も、姦淫を犯すことになります。

ここで「金銭を好むパリサイ人たちが」「神の前では忌み嫌われるもの」として登場しています。彼らこそまさに主人の怒りをかい、管理の仕事を取り上げられる不正な管理人です。しかしトーラー、律法によれば彼らはアブラハムの子孫、イスラエルの民でありその選びは変わりません。まさに「律法の一画が落ちるよりも、天地が減びるほうが易しい」とたとえられているとおりです。ですからここから必ず「主人にほめられる不正な管理人」としてのイスラエルの残りの者が起こされてくるのです。

しかし「律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音が宣べ伝えられ」とはイエシュアが異邦人の地と呼ばれたガリラヤから「神の国の福音」の宣教を開始されたように、イスラエルだけでなく異邦人も、まさに「だれもが力づくで」救いに入るようご計画がなされました。この「力づくで」と訳さ

れているハーザク(פִּינְק)は本来、ただ主のあわれみにより救うべき者の腕をつかむ(創 19:16)という意味の言葉です。

創世記【新改訳 2017】

19:15 夜が明けころ、御使いたちは口をせき立てて言った。「さあ立って、あなたの妻と、ここにいる二人の娘を連れて行きなさい。そうでないと、あなたはこの町の咎のために滅ぼし尽くされてしまいます。」  
19:16 彼はためらっていた。するとその人たちは、彼の手と彼の妻の手と、二人の娘の手をつかんだ。これは、彼に対する主のあわれみによることである。その人たちは彼を連れ出し、町の外で一息つかせた。

これはソドムとゴモラの滅びから救い出されるロトの家族についてのものです。このロトはアブラハムの子孫ではなく、モアブ人やアモン人の父祖となる、異邦人の中の義人の象徴です(ペテロⅡ2:7)。彼は目の前の滅びを前に「ためらって」いましたが、ただ「彼に対する主のあわれみに」よってまさにハーザク「力づく」で救い出されました。同様に私たち教会もやがて死の中から力づくでよみがえらせられ、手をつかまれ、天に携挙されます。そして大患難の中で主イエシュアを、御国の福音を聞いて信じる大勢の諸国の民もまたそのようになされます。そのような異邦人に対する救いが「律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音が宣べ伝えられ、だれもが力づくで、そこに入ろうとしています」というたえには秘められているのであり、決して私たちが自分の力で、努力やがんばりで「神の国」に入ることを教えているものではないことを覚えてください。

そしてこれらの選び、神のご計画はモーセをとおしてイスラエルに与えられた律法には表され、秘められており、そのすべてが成就されます。まさに「律法の一画が落ちるよりも、天地が滅びるほうが易いのです」とあるとおりです。そしてそれは夫であるイスラエルの神であられる主が、花婿であるイエシュアが妻として、花嫁として選んだイスラエルと異邦人を決して裏切ることがないということを指し示して「だれでも妻を離縁して別の女と結婚する者は、姦淫を犯すことになり、夫から離縁された女と結婚する者も、姦淫を犯すことになります」ともたとえられ、神の国の民となる者たちへの変わらぬ愛を約束しておられるのです。つまりこれらのたとえはすべて人が何かをし、または何かをしないということを命じた戒めなどではなく、神が、主ご自身が必ず成し遂げられるそのご計画を表したたとえなのです。

神である主がモーセを通して与えられた律法、トローラーの最初の一文、すなわち創世記 1:1 にこうあります。

創世記【新改訳 2017】

1:1 はじめに神が天と地を創造された。

このように聖書は「神が」天と地すなわちすべてのことをなされるということが記されたものなのです。人が、私が、ではありません。すべて「神が」なのです。私たちはただそれを聞き、信じてその完成、完了を待ち望むのみです。そして私たちが聞いたこの事実を他の者にも聞かせるよう宣べ伝えていくのですが、それは終わりの日に起こされるイスラエルの残りの者を指し示す「型」たとえであることを今日の箇

所に秘められたこれらの奥義から、ぜひ覚えていただきたいのです。そしてさらに言うならばやがて大患難の前に天に携挙される私たちは、このイスラエルの残りの者の宣教によって救われ、御座の前に引き上げられる大勢の諸国の民の「型」ともなることを今日、ぜひ覚えていただきたいのです。私たちをとおして表される神のご計画が、必ず成就することを信じます。アーメン